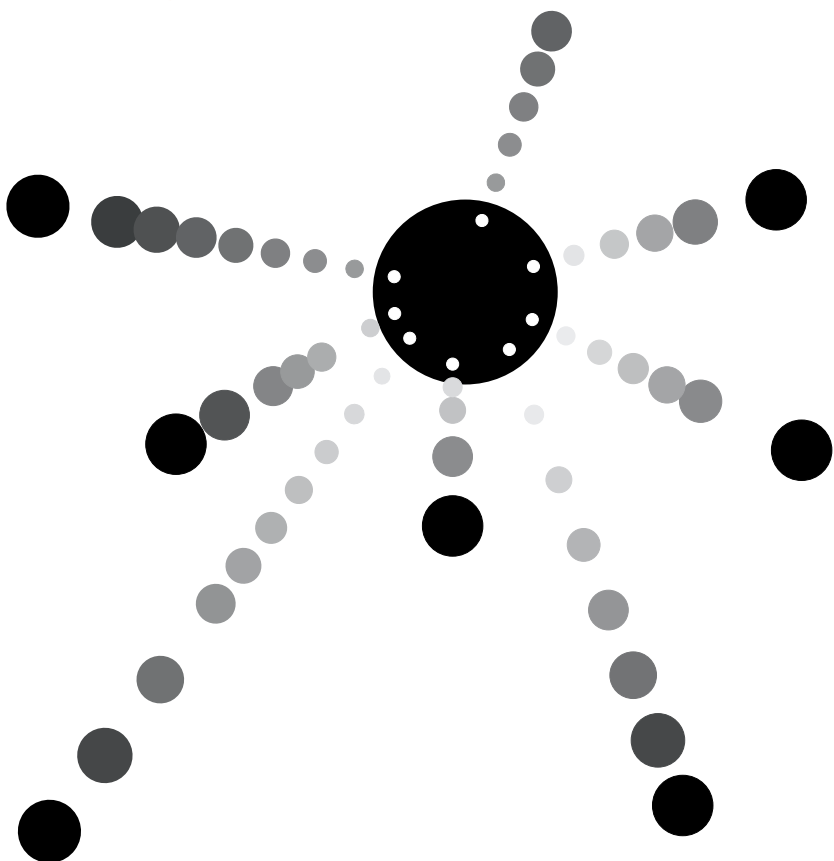
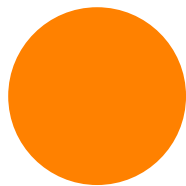




10人の息子

ぶんろく——Bunroku's Factory

10人の息子

ぶんろく

Bunroku's Factory

臓器の移植に関する法律（改正 平成二十二年二月三日法律第一六〇号）

第二条 死亡した者が生存中に有していた自己の臓器の移植術に使用されるための提供に関する意思は、尊重されなければならない。

第十一条 何人も、移植術に使用されるための臓器を提供すること若しくは提供したことの対価として財産上の利益の供与を受け、又はその要求若しくは約束をしてはならない。

2 何人も、移植術に使用されるための臓器の提供を受けること若しくは受けたことの対価として財産上の利益を供与し、又はその申込み若しくは約束をしてはならない。

◆高梨伏雄◆

町会の副会長をやったこともあり、面倒見のよかった鈴木葬式は、一人ぐらしの老人にしては、にぎやかなものだった。同い年のものたちが集まって「こんなときにはばかり顔を合わせて」「つぎは、わたしですよ」と言い合っているのは、悲哀よりも、諦観を感じさせた。

伏雄は記帳を済ませ、焼香の列に並んだ。普段、家で仕事をしていても、主婦のように買い物のついでに世間話をする事の少ない伏雄にとって、慶弔事るときに耳に入ってくる世間話は新鮮なものばかりだった。いまでも伏雄の前では、亡くなった鈴木と同年輩の男たちが話していた。

「なんでも鈴木さん、死んでから、腎臓と角膜を人にあげたそうだよ」

「ああ、死んだら臓器を上げるってあれかい」

「それぞれ。だから通夜が一日遅れたんだってよ」

「鈴木さん、生きてるときも面倒見が良かったからなあ。あの人らしいじゃないの。それじゃ、鈴木さんのめん玉と、腎臓はどっかで生きているんだ」

「そういうことだね。でも、なんか不思議だなあ、本人は死んじまったのによ」

「あんたも、わるさばかりやってきたんだから、どうかね、功德にさ」

「ぞっとしねえな。死んでから身体を弄くり回されるのは」

「死んでんだから関係ないべ」

「だけどよ、あの世で目が見えなきゃ困るさ」

そういつて入れ歯をカクカク鳴らしながら二人の男は笑っている。

伏雄はめがねをかけた鈴木 of 遺影に手を合わせながら、角膜を人にあげてしまつて、三途の川を迷わずに渡れば良いがと思つた。焼香を済ませ、精進落としの席についた。酒を口にし、煙草に火をつけた。伏雄と背中合わせの席にいた女が八百屋の娘のことを話していた。

「聞いた？ 八百繁さんとこの娘さんの子ども、じつは——」

急に声を低くした思わせぶりの女の口調に、はしたないとは思つたが伏雄は思わず、耳にそばだてていた。八百繁の娘は、伏雄より三歳年下だった。小学校の時は登校班が一緒だった。最近子供が産まれたことは、八百繁のおかみさんから

聞いていた。「かわいいわよお。店番してても、孫のことが気になっちゃってき。伏雄ちゃんも早くお嫁さんもらって孫をお母さんに見せておあげよ。喜んで起き上がっちゃうよ、きつと」という、おっせかいのおまけがついたが。

八百繁はいまどき珍しく量り売りもしてくれるので、親子二人暮しの伏雄はいまでも鼃肩にしていた。子供のころから伏雄を知っている気安さから、八百繁のおかみさんは、娘が婿をもらったのに、子供ができない、不妊治療をしているけど、保険がきかないから、金がかかってしかたがないという愚痴を聞かされたことを思い出していた。

「なんでも、代理母に産んでもらったらしいよ」

「だけど、おなか大きかったじゃない」

「タオル巻いたりして、ごまかせるし、なんとでもなるじゃないの」

「代理母ってどこで見つけたの」

「いとこらしいわよ」

「だけどき、そういうとき、どうなるの。実子になるの?」

「無理なんじゃないの」

「じゃ、養子ってことか。子どもがかわいそうね」

「最初から、養子をもらえば良いのにね」

「自分の血を引いた子どもが欲しいんじゃないの」

「わたしは、そんなこと考えて子どもを作ったことないからな、よくわからないわ」

「じゃあ、どういうつもりで作ったのよ」

「まあ、経験かなっておもって」

「どうでしたか、経験されて」

「もうこりごりね。うちの上の息子がさ、最近、旦那に似てきて、ぞっとする時あるわよ。引く血にもよるんじゃないのお。まあ、苦労しないでも子どもが生める体を持った幸せって言えばそれまでだけど、そこまでして子どもなんてつくたっていいことないわよ。うちのはもう一人欲しいって言うけどさ、もうたくさん。うるさいし、なまいきだし、第一、旦那は子どもが欲しいっていうだけで面

倒見てくれるわけじゃないし。子どもが欲しいってのは口実でさ、実は、避妊するんのが面倒なだけなんじゃないかと思うわよ」

「そうかもね」

女は弾けるように笑い、場所を考えて慌てて手で口を押さえたが、ぶふふふと笑いは止まらない。

代理母の存在は、伏雄も聞いたことがある。しかし、こんなに身近にその実例があるとは思ってもよらなかった。出産を依頼するには、一〇〇〇万ちかい金がかかるという新聞記事を読んだことがある。それにしても、どこからこんな話は漏れてくるのだろうか。

子どもはかわいそうだ。女たちがいうように代理母から生まれてくるからではない。世間は知っててそれを隠すからだ。子どもが欲しいというのは「公然」なのに、出生は「秘匿」される。

伏雄は、銚子を一本あけると帰宅した。

「おかあさん、もう少し食べたら」

伏雄は、母久子の口元にスプーンで粥を運んだ。碗にはまだ半分以上残っている。しかし、母は唇を閉じたまま開けようとしなかった。心なしか、唇の色が薄くなってきている。冬に向かう季節がそうさせているのかもしれないが、時の流れの中で、母が昨日より今日、朝より夕方という薄皮をいちまいずつはがすように弱っていく。

「もういらないの？ おしまいにする？」

伏雄が重ねて尋ねると、母はまぶたを一度、開閉した。それは、瞬きといったなかば無意識の動作ではなく、閉じ、開けるといふ必死の作業だった。まぶたの開閉、これが、母に残されていた、コミュニケーションの唯一の手段である。

母が脳梗塞に倒れたのは、おとし秋のことだった。一命はとりとめたものの、重篤な病状で、リハビリで通常の生活への復帰が望めるようなものではなかった。母方の親戚はみな長寿で健康だった。伏雄も物心ついてから、母が病気になった記憶がないだけに驚いたが、その二カ月前に父が急死し、心身ともに蓄積した疲労が一気に爆発したのだらうと思われた。

退院する母に向って主治医は「お母さんは心臓も胃も丈夫です」と太鼓判を押した。だが、言葉とは裏腹の申し訳なさそうな医者顔は「このままの状態で長生きされるお母さんの面倒を見るのは大変ですね」という本音を物語っていた。でも、伏雄は母が生きていてくれて良かったと思った。幸い、伏雄は独身で、翻訳家として家で仕事をしていた。食事の用意も、一日置き風呂も、下の世話も、伏雄がやった。手順をおぼえ、リズムが身につけば苦にはならなかった。母の身寄りはずでなく、伏雄のやりかたに文句を言うものもいなかった。

もともと「家が好き」な伏雄は外に出られないことでストレスを感じるたちではなかった。母も痴呆老人とはことなり、静かに寝ているだけで、取りたてて手がかかるわけではなかった。

どうにも体調が悪いときや打ち合わせで外に出なければならぬときには、身体が二つあれば良いのと思うこともある。以前、テレビで見たヤツデヒトデの分裂をうらやましく思った記憶がある。このヒトデは、自分で手を引っ張り合って、身体を二つにひきちぎり、クロンをつくる。しかし、不幸にしてヒトデでは

ない伏雄は臨時のヘルパーを頼んで、急場をしのいできた。

しかし、例年になく猛暑続きだった今年の夏をすぎたところから母が徐々に衰弱してきた。作り上げた毎日のリズムが、少しずつ狂いはじめ、伏雄はいらだつことが多くなっていた。

「おかあさん、八百繁の娘さん覚えているでしょう。ようやく子どもができたんだってさ。どうしても子どもが欲しいからといって、不妊治療をしていたんだってよ。そうとう治療費がかかったって、おかみさんがばやいてた。まさに、金の卵だってさ。八百屋の跡取りじゃ割に合わないって、将来は医者か弁護士、さもなきゃ政治家にして金儲けさせて、もとを取るんだっていまから息巻いてる」

母が寝ついてから一年ぐらいは時折見舞いに訪れて世間の情報を届けてくれた母の友人もほとんど亡くなってしまう、残った人も病院に入院していて、いまだ母を見舞う人はいない。テレビやラジオから流れるニュースで、世界の動きは耳に届いていても、母の世界——世間の情報はすっかり途絶えていた。気がついたら、この世で自分だけが残されていたということはある日突然知る——その可

能性は低かったが——よりも、母にとっては心安らぐだろうと思い、伏雄は務めて世間の話題を口にした。かつては御用聞きに来ていた酒屋がコンビニに変わり、風呂屋がつぶれてその跡地にマンションが経ち、ガソリンスタンドがファミリーレストランに変わり、総合食料品店が駅前に出店してきた大型スーパーに押されて店じまいしたといったことを毎日、母が寝息をたてはじめるまで聞かせるのが日課になっていた。

結婚をしたこともなく、子どもを欲しいと思ったこともない伏雄には、子どもが欲しいという気持ちの根源が理解できなかった。伏雄も近所の人から「早く結婚して、孫の顔を見せてあげなさい。親孝行よ」と言われるが、親孝行でこの世に生みだされる子どもも迷惑だ。

八百屋の娘も、まわりからやいのやいのと言われて、しかたなく、不妊治療を受けたらしい。しかたなく得た子どもに幸はあるのだろうか。その子どもが長じて非行に走ったときに、あんなことまでして、子供を持つんじゃないかと思うのではないだろうか。

種の保存は生き物の本能だというが、本能である以上その行為は無意識のはずだ。人間は、本能を凌駕する知性を持ちすぎたのかもしれない。子どもを産み育てるということに、「意味」や「意義」を求める。

跡継ぎといったって、子どもは親のコピーじゃないのだから、うまくいくとは限らないし、だいたい親が子どもに継がせるものとはなんだろうか。少なくとも家財産ではないだろう。血統か？ 本当に血統にこだわっていたら、いまごろ人類は滅びているに違いない。いいかげんに種の保存をしてきたから、ここまで、はびこってきたのだ。

結局、子どもを作る、家を継がせるというのは、家・財産や血といった有形物の継承ではなく、自分の存在を意味あるものにしたという行為の一つなのかもしれない。生きてきた証だ。とりたてて才能がなくても、万人が等しく行える唯一の意味ある行為。自分の死後、自分の存在が無になることは確かに恐怖だ。でも、子どもがいれば、記憶が残る。そこに、自分は生きていることができる。

伏雄も子どもが欲しいなと思つた。独身の自分でも、借り腹を使えばでき

るのだろうか。しかし、生まれてきた子どもには母親が必要だろう。

「おかあさんも、孫の顔みたい？」

母は目を閉じたままである。

「おかあさんは、どうしてぼくを産んだの？　ぼくを産んで幸せだった？」

伏雄は母をちよつと困らせてみた。何かの拍子で怒り出して声を発するかもしれないと思った。しかし、母は静かに目を閉じたままだ。

「おかあさん、大正湯の裏手に住んでいた鈴木さんのおじいさん覚えているかな。今日、お通夜だったんだ。一昨日、亡くなったんだって。とうさんの葬式の時も、来てくれて、受け付けをやってくれてたじゃない。元気だったのにね」

かさかさの母の脛をマッサージしながら、鈴木のお通夜の様子を母に語り聞かせた。

◆本山伏雄◆

伏雄は「父」と「母」の墓参りに来た。

東京郊外のその寺は住宅に囲まれ窮屈そうだった。

山門をくぐると参道の右手に寺が経営する幼稚園があった。夏休みの今、子供たちの姿はなく、ひっそりとしている。「父」はこの幼稚園に通ったはずである。正面に本堂がみえる。その裏が墓だと思当をつけた。本堂を左に回りこんで墓へ向かおうとして、花も線香も持っていないことに気づいた。伏雄は本堂右手の庫裏に向かった。呼び鈴を押し、外よりはいくぶんひんやりとし三和土で待っていると、柿渋色の作務衣を着て、頭に手ぬぐいを巻いた坊主が出てきた。

「すみません、線香をいただけませんか」

「いくつ」

「ひとつでいいです」

坊主は玄関脇の小部屋から線香を一束持ってきた。小さなバーナーで火をつけると、「二〇〇円」といいながら差し出した。

伏雄は、もうもうと煙を上げている線香を顔から遠ざけるようにして、「高梨の墓はどこですか？」と尋ねた。

「この寺の檀家には高梨という苗字の家が多いんです。おじいさんかおばあさんの名前をご存知ないですか。屋号でもいいですよ」

「確か、おじいさんが善三郎といったと思います」

「あ、それは甚八さんところだ。ちよつとわかりづらいから、ご案内しましょう」坊主は、雪駄を引っ掛けると、前に立って歩き始めた。墓地に入ると、楠が日陰をつくっていた。その根元には小さな水たまりがある。

その風景に伏雄は見覚えがある——と思った。

わんわんと降るような蟬時雨だった。それでも坊主は「今年は暑いのに蟬が少ないんですよ。七年前も少なかったんですね」などといいながら、昨夜の送り火の燃え滓が残る墓と墓の間の狭い通路を進んでいく。供花が残暑にじりじりと焼かれ、数日間盛大に焚かれた線香の匂いがまだ残っている。伏雄は先に行く坊主が「高梨の家とはどういう関係ですか」と尋ねてくるかと思った。伏雄は「母から、自分の名前は、昔世話になった高梨の家の人からもらったと聞いたものですから」と答えるつもりでいた。しかし、坊主は何も聞いてこなかった。

「こちらです」

坊主はそういうと、墓石に向かって、ブツブツと短い経を唱えて、帰っていった。

高梨家の墓は、周辺の墓よりも少し大きめだ。墓所の両脇に、半伽仏を彫りこんだ墓石が数体並んでいる。永禄、元禄といった江戸時代の元号がかすかに読み取れた。檀家の中では、筆頭とはいかないまでも有力なほうなのだろう。

伏雄は、水を持ってくるのを忘れた事に気がつき、水屋にとって返した

水はつるつるとした黒御影の墓石をすべり、伏雄の顔を写した。線香を供え、手を合わせ、静かに目を閉じた。そして墓の横に回りこむと、墓石に刻まれた仏の名前を読んだ。

俗名伏雄 平成一二年一月二三日

俗名久子 平成一三年八月八日

「父」伏雄は二〇年前、「母」久子はその翌年に死んでいた。伏雄は墓の正面に戻り、再び手を合わせた。

「おとうさん。ふふ、そう呼んでいいんだよね？ はじめまして。それから、おかあさん、来るのが遅くなってごめんなさい。あなたの息子の伏雄は、こうして元気に育ちました」

「父」のことなら自分のことのように知っていた。しかし、それは、手が出ないほど高値の車やパソコンの仕様に精通しているのと同様の、どこか現実感の乏しいものだった。墓を前にして、その下にある骨をイメージしても、それは変わらなかった。

伏雄は顔を上げ、一段高くなった墓所からおりると、桶に残った水を脇の半伽像に掛けた。ジュワシユワと音を立てて水を吸い込み、埃の臭いを立てた。

「じゃ」

伏雄は片手拝みをする墓所を後にした。狭い通路を抜け、先ほどの水たまりのほとりに立つ標識を見た。池というには誇大広告過ぎるその水たまりには、鏡池という名前がついていた。名前とは裏腹に植物プランクトンが増殖した水面にも映していなかった。ほとりに立つ栄養不良の松は親鸞が袈裟を掛けた由緒正

しいものらしい。話一〇〇分の一に考えてもうそ臭い、と伏雄は思った。読み終えて、もう一度墓を振り返っても何も感じなかった。先ほどの既視感はやはり気のせいだった。

家に帰ると母がどこにいつてきたのか、ときいてきた。

「墓参り」

「どなたの」

「自分の」

「行ってきたの？」

「うん、一度くらいいいかないと。二十歳の墓参りさ」

「で、どうだった」

「ただの墓だったよ。墓の下から声も聞こえなかった。大丈夫、かあさん。ぼくはちゃんとおかあさんを見送ってあげるから、心配しないで」

「急になにをいいだすの。そんなの当たり前じゃないの。かあさんは、あんたを先に見送るなんて絶対に嫌ですからね」

◆高梨久子◆

久子は死にかけていた。自分でもそれはわかっていて。それでも、まだ死ぬわけにはいかない。息子が帰ってくるまでは。

◆和田晴子◆

和田晴子が、高梨久子の介護をするようになって三年が経つ。月におおくても二、三回、しかも、いつも臨時の依頼だったから、最初のうちは、晴子の勤めるヘルパー派遣会社でもあまりいい扱いはされなかった。しかし、介護保険を利用したものではなく、自由診療ならぬ、自由介護であるため、費用は実費である。そこにうまみもあった。

最初に晴子が派遣されたのは、偶然だった。しかし、その後は、知った人のほうがいいという先方のたつての願いもあり、晴子が担当している。いまでは、晴子の都合がつかないと、先方が予定を変えるようになってきた。ありがたくもあ

り、正直なところ負担でもあった。

高梨の家に行っても晴子の仕事はほとんどなかった。下の世話が一回ぐらい。あとは、室温に気を配り、新聞を読み上げたり、音楽を聴いたりしながら、ベッドの久子に話しかける。ひたすら話しかける。久子はこちらの言うことが聞えているが、返事ができない。わずかに、まぶたの動きが、唯一のコミュニケーション手段だった。久子の息子が一日じゅう出かけるときは、食事の世話が加わるが、それもこれまでに数えるほどしかなかった。

勤務先のケアマネージャーが息子に、「在宅されているときも、食事の介護、入浴の介助などに、利用されてはいかがですか。介護保険を利用すれば、いまよりも、費用が嵩むということもないですよ。息子さんも身体が助かります。息子さんが体を壊したら元も子もないですから」と勧めても、息子の返事はかたくなだった。

晴子は、息子のやり方に口出しする立場ではなかったが、生きがいという生易しいものではなく、おかあさんの世話が生きる目的そのものになってしまってい

る息子のことが心配でもあった。この人、おかあさんが亡くなったらどうなるんだろう。

◆高梨伏雄◆

母は、食も細くなり、一回りも二回りも小さくなったような気がした。掛け布団の起伏は薄くなり、首から下はぺちゃんこなのではないかと思うほどだ。いまでも、窓から差しこむ陽光は母の掛け布団に影を作ることなくまんべんなくふりそそいでいる。

その日の朝、いつものように、母の枕もとに座り、暖めたタオルで母の顔を拭いてやりながら、伏雄は鳩尾に全身の血液が集まるような思いに急に襲われた。手足が冷え冷えとし、それでいて、顔に冷や汗がにじんできた。同じような感覚は、ここ数日、繰り返して伏雄に襲いかかってきた。二日前には、母と風呂に入っている時、その前は、小春日に暖められた縁側に引きずり出したベッドで母の爪を切っている時だった。

春を感じさせる暖かそうな輝きに心奪われて、すきができていたのかもしれない。例年になく寒さの厳しかった冬を母と一緒に乗り越えたという安心感のせいかもしれない。

震える手で母の顔を拭き終わると、飛ぶように洗面所に行き、洗面器の中の湯を捨てながら、吐いた。そして泣いた。

母が死ぬことに耐えられそうもない。母が死んだらばくはどうなるのだろう。母を見送ることは僕にはできない――。

◆本山リえ◆

伏雄が、「父」と「母」の墓参りに行ったと聞いて、嫉妬を感じなかったと言うと嘘になる。瞬間だが、心がグリグリとねじられた。いっぽうで、この二〇年間の人生を覆っていた最後のベールが、さっと取り払われる解放感も感じていた。墓参り――それは、伏雄の「父」との約束のなかで唯一残されていたものだった。約束が果たされた今、その頸から解放される。息子の伏雄もそうであって欲

しいと願った。

りえは、伏雄の父の顔を思い出せない。写真は一枚も残っていなかった。だが、息子と同じ顔だろうという想像はできた。

しかし、彼の人生ならよく知っている。どの町で生まれ、どのような両親に育てられ、どこの学校に通い、どんなテレビ番組を見て、どんな本を読んでいたか。初恋の人の名前とその恋の結末も知っている。仕事は何をしていたか。そして、なぜ、りえが「彼」をみごもったかも。

伏雄に話した「父」のことは、みな、彼からもらったノートに書いてあったことだ。表紙やページをセロテープで補修したぼろぼろのノート。今度の燃えるごみの日に捨てよう。もういいだろう。

◆高梨伏雄◆

父の急死が悲しくなかったわけではない。気がついたときには終わっていた父の死は受けとめるしかなかった。しかし、母の「見える死」は、伏雄にとって恐

怖だった。倒れてからの三年ちかく、毎日、母の食事を作り、足を撫でさすり、話しかけてきた母がいなくなる。母を中心に動いてきた二四時間春夏秋冬がある日途切れる。そう思うと、子どもの時分からの母との思い出が、脳裏にプツプツを浮かび上がってくる。泣き虫だった伏雄を泣きながら叱る母、伏雄の手を引いて小学校の入学式に行く母の和服から臭う樟脳の香り、庭のたらいで水浴びする伏雄を微笑みながら見つめる母――。

伏雄は、母の死を受けとめ、耐えることではなく、その苦しみから逃れるすべはないものか考えた。

答えは簡単、母よりも先に自分が死ねばいいのだ。自分の死――伏雄にはそれが、いま伏雄が感じている以上の苦しみを、ベッドで寝ている母に与えるなどとは考えもつかなかった。

答えは簡単だったが、それを導く解法は難しかった。問題がいくつも立ちふさがった。自分が死んだら、母も遠からず死ぬだろう。最大の問題は、それまでのわずかな間、母の世話をしてくれる人を探さなければならなかった。本当

は自分が世話をしたい。でもそれができない。自分が生きる——とは、考えられなかった。

母の命は、今日明日ということはないだろうが、急がなければならない。伏雄は、とりあえず一年後をめどに、仕事を整理し、自分死後の財産管理を委託することから始めた。

◆高梨久子◆

おかあさん、ぼくはおかあさんを見送ることに耐えられない——ですって。優しいそうに見えて、自分勝手。ほんとうにあの子は自分勝手です。おまけにむかしからあの子は逃げてばかりでした。母としてふがいなく思って手を上げたこともあります。

でも、とうとう逃げてしまった。わたしがこんな体でなければ、ひっぱたいてでも止めたのに。ほんとうに自分勝手な子です。

死んでもからあの子は、まだ、人に迷惑をかけている。そんなことちっとも考

えていないんですから、余計にしまつがわるいです。

だから、わたしはまだ死なない。もう一人の息子がそろうまで。そろったら、みんなさんに、お詫びをしてからでないと、とてもじゃありませんが死ねません。私はあの子の母親なんですから。

◆高梨伏雄◆

ベッドに寝転び、伏雄は、宙を睨んだ。母は隣室で静かに寝ている。

自殺するだけなら簡単だ。問題は、そのあと、どうやって自分を生かすかだった。

死んだ後、身体が使い物にならなくなる薬物死や飛びこみ自殺は論外だった。「さて、どうすれば、脳が不可逆的な状態になった段階で、発見されるかだ」

脳死——それが、伏雄が目指すものだった。

それには自宅や人気のないところで死ぬのは問題外だった。かといって、人の目のあるところで死ぬなんてもってのほかだった。

◆本山りえ◆

二一年前、りえはアメリカにいた。

西海岸のカレッジを卒業したあと、日本に帰るふんぎりもつかず、日本料理店のウェイトレスをして生活をしていた。留学といえは聞こえは言いが、高校を中退した娘をみかねた両親が、アメリカの学校に押しこんだだけのことだった。そんなとき、インターネットで見つけたバイトにひかれた。

代理出産母の募集だった。クリニックのWEBページをみていくと、日本からの依頼も多数ある。報酬はともいい。代理出産——倫理的に良くないことなのだろうか？ りえは考えた。しかし、そうした躊躇より先に、りえの心を掴んだのは、WEBに掲載されていた「子供を欲しがる人々からあてにされ、愛情を注がれるのは、なんともいえぬ幸福感だった」という体験談だった。

妊娠した子供に対して注がれる愛情を自分が感じることができる——りえは、母に愛された記憶がない。アメリカに来ることになったときも「あなたの将来が

心配だから」と母は言ったが、体の良い勘当だった。りえには「捨てられた」という思いしか残らなかった。しつけに厳しい母を、憎んだことこそあれ、無条件で愛したことはなかった。愛されてみたい、うっとしいほど気に掛けてもらいたい。そうすれば、自分を愛し、人を愛せるようになるかもしれない。

一カ月後、りえは医学的チェックと精神鑑定をパスし、代理出産母として登録された。

ことの重大さにくらべて、あまりのあっけなさに拍子抜けしたほどだった。代理出産母は、胎児に「環境」として影響を及ぼすため、妊娠中は、クリニックの徹底的な管理化におかれる。しかし遺伝的な部分に関してはまったく関与しないため、知能や性格の良し悪し、容姿の美醜などはさほど問題とならない。ようするに、依頼人が、こんな「器」から生まれてきたのか、と眉をひそめるほどでなければよしとするということなのかもしれない。

アメリカでも不妊治療は盛んだ。いまでは、シングルや同性愛のカップルも子どもを持つ夢をかなえてくれる。日本では結婚して一人前という風潮があるが、

アメリカでは、ファミリーをもって一人前だからで、そのファミリーには子どもは不可欠の要素だった。アメリカでは養子が多くみられるのはそのためだ。だが、白人が好む「白人の子ども」の供給は極端に少なく、そこで、脚光を帯びたのが、体外授精や借り腹だ。他人の卵や子宮であろうが、使えるものはなんでも使つて、是が非でも自分の子どもを持ちたいというのは、アメリカ人らしい合理的発想だった。だからここアメリカでは、不妊治療は医療というよりもビジネスだった。それだけに、供給サイドのインフラとしての「女性」の確保はビジネスの要であつた。

そういうこともあって、りえが、妊娠する機会は以外と早くやってきた。依頼主は、代理出産母に「日本人」を指定してきたということだった。

十数ページにわたる契約書にサインし、りえは、三つの卵子を体内に入れた。

◆高梨伏雄◆

伏雄は、病院に母の薬を取りにきた。ざわざわとしていながら、どこか生気の

ない病院の雰囲気は伏雄は嫌いだった。

薬を待つ間、伏雄はいつものように母が入院していた病棟を訪ねた。母が世話になった婦長に挨拶をするためだ。三階にあるナースステーションで面会を申し込んだ。

婦長を待つ間、かつて毎日のように通い詰めた病棟を眺めた。学校を除けば、自分の人生の中でも、多くの時間を過ごした場所の一つだ。近所の人は、完全看護にも関わらず、病院に通い詰める伏雄を口では「親孝行ね。うちのばか息子に、爪の垢でも煎じて飲ませてもらいたいぐらい」と誉めそやしていたが、裏では「いい歳して乳離れができていない」「いや、美人の看護婦が目当てだ」などと噂していた。前者はともかく、後者はまったく的外れだった。看護婦も伏雄のことを「マザコン君」と呼んでいたのを知っている。そのなかで、婦長だけが、母のことを心配し、伏雄のことを案じてくれた。それがさらにまた「マザコン」の噂を補強したのだが。

いやな思い出を紛らわすように病棟内を見まわした伏雄は、非常階段脇のドア

に目を止めた。ドアには「リネン室」とある。午前の回診が終わった今、病棟の清掃に忙しい、掃除のおばさんが出入りしている。鍵はかかかっていないようだ。母が入院中、伏雄もシーツを取りに入ったことがあった。

あそこなら良いかもしれない。この瞬間に、計画の最初のピースは埋まった。懐かしそうに母の容態をあれこれと尋ねてくる婦長にそそくさと挨拶をすませ、薬を受け取ると、自宅へ走りかえった。

自殺の方法は、首吊りと決めた。脳梗塞や脳内出血といった病気は自分の意のままにつくりだすことができない。残るのは、ピストルで頭をぶちぬくか、首吊りだった。ピストル自殺は、確実だが、迷惑をかけすぎる。リネン室のタオルもシーツも使い物にならなくなるだろう。残されたのは、首吊りだった。

自殺の場所は病院のリネン室だ。病院なら、人工呼吸器もある。脳の損傷と人工呼吸器がなくては、死ぬことはできても脳死にはなれない。

病院のリネン室に忍び込み、そこで首を吊る。清掃が行われる時間は、清掃員の出入りも多いので、昼前の時間にする。

発見されないと困るので、タイマーをもちこみ、首を吊る直前に、首を吊って一分後に鳴るようにセットする。気がつかれて発見されるまでに数分あるとしても、脳がダメージを受けることは確かだ。しかし、もうもとはには戻るまい。万が一失敗して生き返ったら、別の病院でチャレンジすればよいと思った。そして、考えたくないことだが、まんまと脳死になれずに、本当に死んでしまったとしても、それはそれで、しかたないと思っていた。

◆ベニズリー◆

自分の子どもを欲しがる人間はたくさんいる。現代では、その願いは、ほとんどの場合適う。いまや、生殖産業はビジネスとして巨額の利益を生むものだった。北米の小都市の税理士ベニズリーは、そこに目をつけた。

ベニズリーは、医師と生化学者を雇い、クリニックの経営をはじめた。

奇妙な客が増えたのは、クローン羊ドリーが生まれてからだ。自分自身のクローンや、事故で亡くなった子供のクローンを創ってくれないかという依頼が

くるようになった。

ベニーズリーは、それがあらたな金の卵だと気づいた。だが、倫理的な批判が予想された。

そこで、ベニーズリーは、自分で倫理を作りだすことにした。地球人は宇宙人のクローンにすぎない。クローン製造は、地球人に与えられた進化の手続きであるという教義を掲げた宗教団体「新人類創造機構」を設立し、その傘下に、クローン人間を作るイタミノルービ財団を設立した。そして、クローン人間を創ると公言して、世界を驚かせた。同時に、世界中から批判を浴びることになった。

ベニーズリーにとってそれは予想されたことだ。なにも、人殺しを奨励するわけではない。人を幸福にする手段を提供するだけのことだ。やましいことはなにもない。いまは認められている体外授精すら、すこしまえまでは、神を冒瀆すると非難したことを世間は忘れている。

クローン人間製造は、障害を持って生まれる可能性が高すぎる、危険な行為であるという。だからといって、技術的には可能なことを、試してみることもせず

に、中止するのは、科学者にとって欲求不満がたまることをベニズリー知っていた。危険が多いというならば、核実験のほうがよほど恐ろしいことのはずなのに、科学者は止めようとしないう。人を殺し、不幸せにする行為にもかかわらずだ。今は、非難の嵐でも、実験の向こうにあるのは、称賛と名誉かもしれないのだ。人類の救世主となるかもしれないのだ。それが果たされなかったとしても、世界で初めて試したものであるとして名が残る。

科学者は変な生き物だ。ほかのものが失敗すると、その失敗を繰り返さないように、実験を重ねようとする。そうやって、科学は進歩してきたのだ。

たしかにクローン人間の成功率は決して高くない。しかし、ゼロではない。ゼロでない限り試してみる価値はある。しかも、チャレンジするだけで、人は惜しみなく金を払う。

クローンを作りたいという人間は探すのに苦労しない。問題は、かれらに協力するものたちだ。

クローン人間製造には、大量の卵子と借り腹が必要だ。クローンに必要な卵子

も子宮も、生まれてくる人間にとっては、器に過ぎない。肌の色も、宗教も、社会階層も関係ない。

しかし、依頼主が卵子や子宮の持ち主の外見にこだわる場合は、クリニックを通じて、クライアントの希望に適った人間を集めればいい。問題はその他大勢をいかに効率よくリクルートするかだった。

ベニーズリーは、南米の貧民街に目をつけた。

こらえ性も避妊の知識もない夫の子どもを宿し、貧しさを再生産しつづけるより、痛い思いをしても、「金の卵」として売ったほうがましだと思う女性はいるはずだった。

一人の女性をリクルートし、ほかの女性を誘うように仕向けた。勧誘した「親」の卵が分裂し、妊娠し、無事出産すれば、報酬がもらえる。もし、自分が勧誘した「子」の卵が妊娠出産したら、報酬が上乘せされるのだ。つまりは、MLM——マルチレベル・マーケティングである。

案の定、あっという間に、金の卵を生むガチョウが集まった。

◆高梨伏雄◆

代理出産斡旋業者は、ネットで検索すると何件もヒットした。日本に窓口がある、業者にアクセスして、値段や条件を調べた。しかし、伏雄の希望に合う業者は見つからなかった。

伏雄は、自分の子供を産んでもらおうというのではない。自分自身を生んでもらおうと考えていたのだ。クローンである。自分が死んだ後、自分で自分の墓参りをする。ちょっと愉快だった。SFの主人公になった気分だ。死ぬと決めたのに奇異な行為といえればそれまでだが、伏雄も人並みに、自分の血を分けた子どもを残してみたいという誘惑に駆られたのだ。

結局、北米の科学振興財団イタミノルービが計画しているヒト・クローン・プロジェクトに申し込んだ。

「科学は、いまはそれが悪魔の仕業と思えるものでも、二年後三年後には、神の御業となりうるのです。怪しげな錬金術から現代生活を支える数々の科学が生ま

れました。生殖技術もまたしかりです。人間の発生は、化学的な反応の連続です。神の領域でもなんでありません。性交による生殖と、顕微鏡とピペットを使った生殖にどれほどの差があるのでしょうか。人工授精やクローンは、家族を崩壊させると主張する人々がいます。しかし、その家族像は、過去の因習の上に成り立ったものであり、それをもって、新しい人類を判断することはできません。科学は、人間の思考が生み出すものです。それは実験され、証明されることを望んでいます。クローン技術に対し、危険であると指摘する声もあります。しかし、現在、わたしたちの生活を支えている技術で危険でなかったものなどあるでしょう。火をこらんなさい。最初に火を手懷けた人間は、神と恐れられたか、悪魔として撃ち殺されたことでしょうか。しかし、やがて、人間は火を飼いならしました。クローン技術もまた然りです。危険に躊躇し、挑戦することを恐れていては、進化は望めません。あなたは、フロンティアに立っています。切り開くには勇気が必要です。しかし、あなたは、決して一人ではありません。続々と続くものがあるのです。あなたは、かれらから、尊敬と敬愛を持って賛美されることでは

う。わたしたちイタミノルービ財団は、世界からクロールプロジェクトの賛同者を集めました。そして、いま、その第一歩を記すのです。世界の六大陸から選ばれし、新しいアダムとイブたちよ、出でよ」

伏雄はイタミノルービ財団の東京事務所で、高価そうなビジネススーツに身を包んだ財団の主宰者のビデオを見せられたあと、契約書にサインをした。契約の付帯条件として、借り腹は日本人であること、出産は日本の指定の病院——母が入院していた——で行うことを求めた。別途料金を足すことで、契約は成立した。

◆本山リえ◆

受精卵を体内に入れてから、リえはクリニックに入院していた。看護婦や医師の気遣いが嬉しかった。たとえそれが、受精卵を心配するものであっても。数日後、リえは、三つの受精卵のうち一つが無事着床し、妊娠が確認されたことを告げられた。成功を祝福する医師たちが、リえに「おめでとう」と声をかけてくる。つわりが収まると、出産まではクリニックの管理化におかれるため、一度自宅

に戻り、引き払って、再入院するように言われた。クリニックからは、引越しの手伝いのスタッフが付き添ってくれる。せっかく着床した子どもを無駄にしないのだろう。再入院の途中、ショッピングモールに立ち寄った。身の回りのものをそろえようと思ったのだが、目にとまった、ベビー用品を買いこんでしまった。自分では使えないのに。

クリニックでの生活は、愛情と心遣いに包まれた幸せな時間だった。看護婦も医師も、掃除のスタッフまでもが、常になりえに声をかけ、気遣ってくれる。まるで、自分が新生児になったような気分だった。

妊娠一週を過ぎて、安定期に入り、飛行機による移動のタイムリミットが迫ったとき、日本に帰って出産するように指示された。クライアントの希望だという。

帰国後直ちに、クライアント指定の病院で検診を受け、出産予定日をクリニックの関連組織であるイタミノルービ財団の日本窓口知らせると言い渡された。日本での健康管理や報酬の受け渡しは、すべて、この財団がおこなうとい

う。また、りえの胎内の子供の親にも面会がセツトされているらしい。

日本に帰国する――、りえにとってあたらしい出発となるはずだった。

◆高梨伏雄◆

イタミノルービ財団事務所からの連絡で、「彼」を生んでくれる「母」が帰国したと連絡があった。伏雄はいそいそと面会に出向いた。本山りえという名の母が、余りに若いので正直、伏雄は驚いた。本山の腹はすでにせり出している。

自分が、自分よりも二〇歳近く歳若い目の前の女性の体内にいるのかと思うと、恥ずかしいようでもあり、嬉しいようでもあり、むずむずするような感じだった。りえの腹に手をあてさせてもらったときには、うれしさのあまり泣きだしそうになった。

そんな伏雄に「男の子だそうです」と、りえが微笑みながら告げたときには、おもわず「当然だよ」と言いそうになった。りえがさしだした、胎児の超音波画像に自分の姿を確認し、知らずうちに頬擦りをしている自分に気がつき、顔が

真っ赤になった。片手で腹をさすりながら、クククと笑う「母親」りえがたまらなくいとおしかった。

一カ月に一回、わずか三〇分ばかりの自分との逢瀬は待ち遠しく、楽しいものだった。自分を宿してくれている「母」もまた、いとおしい存在だった。臨月を迎えた本山を母が入院していた病院の産科にはやめに入院させると、伏雄は最後の準備にかかった。

◆本山りえ◆

日本に帰国したことを、りえは両親に告げなかった。数日置きにメールで連絡を取っておけば、両親は、それ以上の関心を持たないようだった。

りえには、マンションが用意されていた。そこには、家族もいた。りえの母親よりもすこし年かさの女性だった。彼女が、なにくれと、りえの面倒を見てくれた。

おなかの子供の父親、高梨伏雄は、おとなしそうな男だった。妻が面会にこな

いことを不思議に思ったが、子供を産めないからだということは、病気なのだろうと、りえは解釈した。

挨拶をすませた高梨が、おなかに触ってもいいかと聞いてきた。りえが承諾すると、おずおずと手を伸ばし、腹に触った。「ここにいるんだね」とひとこと言いい、微笑んだ。

つられて、りえも、微笑みを返した。

「からだはつらくないですか？ 困ったことがあったらなんでもいってください」りえが、男の子だとつげると、高梨は心底うれしそうに、そうかいそうかいといいながら、超音波画像をなでさすった。

いとおしそうなその姿に、りえは、わがことのように喜びを感じていた。一カ月ごとに会う度に、りえは いたわられ、心配され、無条件で愛される喜びを感じた。

臨月を迎えると、心配だから早めに入院するようにといわれた。入院するりえを高梨は、心配しつつも、励まし、見送ってくれた。

◆高梨伏雄◆

伏雄は、りえにもらった胎児の超音波画像をフォトフレームに入れ、仕事机に置いた。いま、その写真の自分に語りかけるようにして、遺書を書いていた。自殺を決行する病院宛および医者宛、そして、二人の「母」に宛てたものだった。

病院宛ての遺書には迷惑を掛けることを詫びた上で、臓器提供の意思を書き、臓器提供意思表示カードも同封した。カードの欄外に「一、提供を受けた人に対し、手術の成功後、臓器ドナーである自分の名前と住所をレシピアント本人に通告すること。一、臓器摘出時には、ドナーに充分な量のモルヒネを注射すること」の二点を付記した。モルヒネに関しては、もし、万が一、現在の脳死判定では拾うことのできない意識レベルが残存していたら、痛みを感じることに、恐怖をおぼえたからだった。

この二条件が満たされなければ、臓器提供は行わないと遺書にも書き記した。

通常レシピエントには、ドナーの情報が直接伝えられることはない。錠破りは承知の上だ。移植臓器は、決して足りていないわけではない。なにも、自分の身内に移植させるというわけではない。倫理的にも問題ないはずだ。

自分を産んでくれた母には、月並みな詫び言と自殺の理由を書き連ねた。母ならば理解してくれると思った。

自分を産んでくれる母には、詫び言を書き連ね、出生届けを同封した。父の欄には、自分の名前を、子供の名前の欄には「伏雄」と書いた。子供を認知しておけば、母の死後、伏雄が受け取るはずの遺産は、すべて産まれてくる子どもに行く。

伏雄は遺漏がないか再度点検すると、封をした。伏雄の写真の前に、三つの封筒とキッチンタイマー、ロープをそろええ置いた。

◆本山りえ◆

入院して三日目の早朝、りえの陣痛が始まった。分娩室に入り、五時間後、り

えは出産した。

助産婦が、赤ん坊を胸に抱かせてくれた。温かいお絞りのような湿り気のあるふにやふにやしたその物体が、彼女の裸の胸に触れる。りえはほとんど重さを感じないことに驚いた。だが、その小さくて軽い物体が放つ暖かさは、りえを大きく包みこんだ。

「わたしのあかちゃん。こんにちは」

りえは、赤ん坊の背にそっと手を重ねながら、微笑んだ。

◆高梨伏雄◆

イタミノルービ財団から赤ん坊が生まれたと連絡を受けた翌日、伏雄は自分に会いに出かけた。

新生児室のガラス越しに、「こんにちは、ぼく」と話しかけた。粘土を叩きつけたようにくちゃっとつぶれた顔が、自分に似ているのかどうかわからなかった。だが、おなじく赤ん坊を覗いていたほかの家族に、「おとうさん似ですね」といわ

れ、伏雄はすっかり気を良くした。

「きみはぼくのクローン。同じ時間を持つものは同時に二つ以上、この世には存在できないんだって。タイムパラドックスとかいうんだよ。だから、ぼくが消えるよ。そうすれば、きみはきつと長生きできる」

伏雄は自分を確認すると母親には会わずに、いったん病院の外に出て、本山りえ宛の遺書を投函した。

再び病院に戻り、非常階段を使って三階のリネン室に向かった。誰にも気づかれずにリネン室に入ると、棚の支柱にロープをかけた。二、三度体重をかけて結び目を確認する。それから棚のシーツを端に寄せ、空いた場所に、遺書を置いた。タイマーの時間をセツトして、ロープに首をかけた。

「さようなら」

声をだし、ロープに体重をかけたとき、タイマーのスイッチを入れ忘れたことに気づいた。伏雄は手をタイマーに伸ばしたが、ついにスイッチに手が届かないまま、伏雄の意識は消えた。

◆石井美智子◆

看護婦になって五年目の石井は、今も点滴が苦手だった。三回に二回は失敗する。二回連続で成功すると、赤飯を炊いてお祝いしたい気分になる。結局今日も失敗した。三回も針を刺しなおして、患者さんのシーツを血だらけにしてしまった。いつものことから、自分でシーツを取りに行った。

リネン室を開けると、普段とは違う異臭が鼻を突いた。リネン室は病院の中で唯一、石鹼の匂いが消毒液の匂いに勝っている場所だった。それがいま、トイレのような臭いが鼻をついた。

なに？ おそろおそろ室内を覗くと、薄暗い照明の下に男が足を投げ出すようにして、柵に「引っかかって」いた。

「もしもし」と男に向かって声をかけながら、近寄ると、男の首からロープが伸びている。

死んでいるの？

「ちよつと、あなた。どうなさいました？」

石井は勇氣をふるって、男の肩に手をかけてゆすりながら、顔を覗きこんだ。うっ血した男の顔に生氣はなかった。

石井はこのとき、男が、毎月ナースステーションニ婦長を訪ねてくる男だとは気がつかなかった。

リネン室を飛び出すと、石井はナースステーションに駆け込み、「婦長おおお」と叫んだ。自分の大声に自分で正気づくような声だった。五〇センチ向こうにいた婦長が「なんですか、そうぞうしい」と耳をふさぐ仕草をしながら振り向いた。

「リネン室に人が」

指先が震えている。石井はそのままへなへなと座りこんでしまった。

石井の様子に婦長とその場にいた医師がリネン室に走っていく。医師の叫び声がして、ストレッチャーが運び込まれた。婦長はステーションに戻ってくると、館内電話で救命治療室に連絡を入れている。

「三階病棟で急患です。縊死です。まだ、時間が経っていないと思われますので、

そちらに移送します。現在、医師が心臓マッサージと人工呼吸を施術中です」

タンカに乗せられた男は、救急治療室に運ばれていった。電話を終え、ストレッチャーに駆け寄った婦長の「高梨さんしっかりしてください」という声で、ようやく、あの男の正体がわかった。

「マザコン君」だ。

◆井上正人◆

「臨床的には脳死です」

救急救命室の医師、井上は告げた。

「しかし、困ったことをしてくれたもんだ」

井上の言葉に院長がうなるように言った。「自殺は一〇〇歩譲って許そう。問題はこの遺書だ。レシピエントにドナーの名前を告げろというのは、ルール違反だろ？」

「問題と言ったら、そういうことよりも、臓器提供のための自殺が許されるかだ

と思います」

「強要されたということもあるということか」

「そうです。しかし、この患者の場合、臓器提供の相手を指定しているわけではないから、そういうことはまずないとおもいます。住所と名前を告げるのは、ドナーのもので、レシピエントのものではないのですから、あとから、レシピエントを探し出して、脅迫するということも考えられませんね」

「井上君、まだ、この患者さんは、ドナーになったわけじゃないよ。口を慎みたまえ」

院長は決断しかねている様子だった。傍らのベッドに高梨が寝ていた。人工呼吸器が送りこむ酸素が、規則正しく伏雄の胸を上下させていた。院長に決断を迫っているかのように、心電図が高い音を響かせていた。

「それ以外は、完璧な意思表示です。貴重な臓器を無駄にするほうが、このかたの意思に反するのではないですか」

「しかし、これが知れると」

「だれにですか」

「マスコミだよ」

「知れたらどうなるのですか」

「煩いだろう」

「なにも、遺書のことまで、マスコミに知らせることはないじゃないですか。それこそ、患者さんのプライバシー侵害ですよ。脳死判定は、遺書とは関係ないでしょう。それにこのごろじゃ、脳死はニュースになりません。もし万が一、事後にマスコミに知れても、このケースは、ドナーが指定する親族に臓器を提供するといったものじゃないです。移植が終わったら、ドナーの身分を明かして欲しいと言うだけなんですから、さして問題はないですよ」

「ドナーカードに家族の署名がないが。家族は？」

院長は脳死判定を避ける口実を探すような口ぶりだった。

「寝たきりの母親だけです。四年ほど前に脳梗塞で、ここに入院していました」
高梨に付き添ってそのまま残っていた婦長が答えた。

「意思確認は取れるのか」

「まぶたの開閉で可能です」

「わかった。警察にはわたしが連絡をいれておく。それから移植コーディネーターに連絡を入れて待機してもらってくれ。婦長は、医師と弁護士と一緒に家族の確認を取ってきてください」

「それでは、脳死判定の準備にかかっていいですか？ 院長」

医師に確認された院長は手にしていたドナーカードをひっくり返し、ミスがないことを確認すると、カードを医師に手渡し、「いいだろう」といった。

「しかし、なんで、脳死体にモルヒネが必要なんだ」

◆高梨久子◆

今日は伏雄の帰りが遅い。病院に薬を取りに行っているだけなのに。いつもは、もっとゆっくりしてくれればいいのに、映画でも見て息抜きをしてくれればいいのに、と思っているのに、いざ、帰りが遅いと心配になる。こんな身体になっても、やっ

ぱり私はあの子の母親なんだわね。ヘルパーの晴子さんは、足もとの椅子で居眠りをしているようだ。

だれかが玄関に来了。がたっと大きな音を立てて晴子さんが立ち上がり部屋を出ていった。きっと居眠りを先生に叱られたときみたいに、はじかれるように立ちあがったのだろう。

しばらくして、数人の足音が久子の部屋に入ってきた。

「久子さんお久しぶりです。小野町総合病院の婦長の高木です。お元気そうですね。それから尾木先生です、覚えていますか」

久子はまぶたを一度閉じた。

それをみていた弁護士が婦長に頷いた。婦長は医師と弁護士の顔を見ると、話し始めた。

あの子が死んだ。伏雄が死んだ。不思議と意外な感じはしなかった。婦長の話だと伏雄は脳死で、臓器提供カードを持っていたらしい。カードには家族のサインがなかったので、確認しに来たのだと言う。

「久子さん、どうなさいますか。息子さんの、意思を尊重してさしあげますか」
伏雄は子供時分から癩癩持ちだった。自分の意思が通らないと、当たり前構わず
暴れたものだ。今度も認めてやらないといけないのだろう。そうしないと、地獄
か天国か知らないけど、あの世でだこねて人様にご迷惑をかけることになるに
決まっている。

久子は、ゆっくりと、まぶたを閉じた。そして久子は、病院の救急車で、入院
することになった。

◆延山昭文◆

小野町総合病院から移植コーディネーターの延山に連絡が入ったのは、一〇分
前だった。

第一報を聞く限り、願ってもないほど完全な提供者である。まだ、血液型だけの
情報だが、コンピュータは、各臓器の待機者リストの中から、該当者をはじき出
し、緊急度に応じて並び変えた。さらに、心臓であれば摘出から四時間以内、肺

は八時間以内に血流を再開させなければならぬため地理的な制約も加わる。回り始めたスロットが待機患者のだれのところで止まるかは、神にしかわからない。可能性のある人たちに、いま知らせてやれば喜ぶだろう。だが、まだ、確定ではない。ぬか喜びは、臓器提供者など現れるのだろうかと疑いながら生きている待機患者患者の希望を木っ端微塵に打ち砕き、下手すれば、命を奪うことにもなりかねない。

脳死が確定するのは、早くても明日の午後だ。

それよりも延山の気がかりは、病院からの電話にあったドナーの書き残した事件だった。

親族に移植を希望するドナーがいないわけではない。腎臓のようにふたつあれば、それもかなえられることもあるが、現実には難しい。法律も否定している。しかし同時に法律は、ドナーの意思は尊重すべきであると定めている。

ドナーが助ける命を選別するのはたしかに、良くないことだ。借金まみれの人間が、自殺して保険金で借金を返すだけでなく、特定の人に臓器を売って、その

利益を家族に遺すなんてことも、不可能ではないからだ。

しかし、今回の場合は倫理的な問題ないはずだと、延山は判断した。ドナーに関する情報をもう少し収集しなければならないだろうが、ドナーの周辺に、ドナーの意思を金に変えようという輩がいない限り、ドナーの意思を尊重しようと思った。

◆高梨伏雄◆

「それではこれより、第一回目の脳死判定に入ります。患者は、高梨伏雄。三十八歳。脳死に至る経緯は、縊死による頸椎および脳幹部損傷です。脳死判定に先立つ前提条件は、クリアしています」

医師はそう言うのと、生命兆候の確認を開始した。

「婦長、このあとどうなるんですか」

リネン室で伏雄を発見した看護婦の石井が婦長に聞いた。

脳死判定は、めったに行われるものではない。それだけに、ICUには、救急

救命室の医師や看護婦のほとんどが立ち会っていた。担当外の看護婦は、部屋の外から見学を許された。

「つづいて、深昏睡、瞳孔の拡大・固定の確認、それから、脳幹反射消失、平坦脳波の確認、最後に無呼吸テストをします。それを六時間後に再度繰り返すんです」

「大変なんですね」

「当たり前じゃないですか。人の生死の問題なんですから」

石井のおかげで、伏雄は無事脳死判定にこぎつけた。死を定められようとしている伏雄が、彼女に感謝しているだろうことなど、石井に想像できるはずもなかった。

◆岩井智美◆

百日紅の花が咲いていた。

「ねえ、安房さん。百日紅って花火みたいだとおもわない。ほら、パンとわれて

まんまるになるやつじゃなくてさ、ブンブンと音たてながら火がアッチこっち飛ぶやつあるじゃない」

今時には珍しく、軒の深い家だった。縁側のガラス戸は開け放たれ、障子も開けられていた。先ほど撒いた水の気化熱で冷やされた風が、土のカビた臭いと濃いみどりの臭いを室内に運んできた。暗い室内に縁取られた乳白色のキャンバスに、夏の日に照らされた十坪ほどの庭が見える。その庭の片隅に大きな百日紅の樹があった。

「蜂とか群蜂とかいうんだ」

「へえー、安房さんくわしいんだ。で、それみたいじゃない。緑のおっぱをひきずってさ、その先に淡い紅色の花が咲いている。そういえばさ、今夜、花火大会があるみたいだよ。江川下崎河川敷ってどこかな？ 行こうよ、みんなでさ。こんなところにじっとしていてもしょうがないじゃない。ねえ、仁君もそう思うよね」

智美に声を掛けられた豎山仁は、新聞から目を離すと「そうだね」と、賛成し

た。豎山は智美の歎心を惹こうと必死だった。だから、彼女の言うことに反対するわけがなかった。知美もその辺のところはわかって利用しているのだろう。

「だけど、久子さんが」

安房が水を差すように言った。

「久子さんもつれていけばいいじゃない」

「ばかいうなよ。いつ死ぬかわからないんだぞ」

「だからこそじゃないの。死ぬときに見ているのがさ、染みだらけで蜘蛛の巣まではっている天井より、夜空に咲いた花火のほうがいいと思わない。わたしだったら、そのほうが良いな。それに、花火が弾けるときの、身体じゅうの隙間で共鳴する音。きっと元気になるよ久子さんも」

「むりだよそんなの」

「なんで？」

「だって、おれたち久子さんとは赤の他人なんだぜ。もし何かあったらどうするのさ」

「あら、赤の他人じゃないわよ、私たち。みんな久子さんの息子じゃない。つまらないなあ」

「じゃあ、帰ればいいじゃないか」

「私もそう思うんだよ。玄関を出ていけばそれまでだって、頭のなかでは思うんだけど。出ていったら、後悔するぞっという自分もいてさ。まいったなあ」

「仕方ないさ。これまで、ずいぶんと長いことベッドの上で不安な気持ちで過ぎていく時間を必死で押さえこもうとしていたんだ。急に時間がたくさんになって、掌からこぼれていくのを見るとあせる気持ちもわかるよ。でもさ、ひとみに少し時間をムダ遣いしても、誰も文句は言わないと思うよ。智美ちゃんも、ほかのみんなも、来年も花火は見られるんだから」

「そうかなあ。でも、つまんない！ 花火行きたい！ 保田さんと大貫さんにも相談してくる」

跳ねるように起きあがると智美は縁側の突き当たりの部屋に入っていった。そこにはこの家の主、高梨久子が寝ている。この時間は、保田義恵と大貫信彌が付

き添っているはずだった。竹岡忠夫と浜野悌一は買い物にでていて留守だった。久子の部屋から聞こえてくる智美の駄々子のような声は、義恵が断わったら仰向けに寝転んで手足をばたばたさせかねないような響きだった。

◆高梨伏雄◆

伏雄に対する脳死判定は無事に終了した。死亡診断書が作成され、移植コーディネーターは、レシピエントの選択に入った。今回は提供臓器が多いため、臓器摘出チームが次々と伏雄に取りかかり、手術室は戦争のような状況になるだろう。最初に臓器を摘出する心臓と肝臓のチームの到着は、一時間後だ。

医師は、伏雄には意識はないと判断した。だが、伏雄の意思を尊重して、摘出手術にはいる前に、モルヒネを注射した。もしかしたら——という気持ちが医師になかったといったら嘘になる。脳死判定の手法は、あくまでも、現段階の医療技術レベルに拘束されているのだから。

最初の摘出チームがやってきて、六時間後、伏雄から、心臓、両肺、左右の腎

臓、肝臓、小腸、角膜が摘出され、全国の八人の患者に移植されることになった。

◆ 豎山仁 ◆

拡張型心筋症で余命一年半と宣告されてから、一年がすぎようとしていた。宣告を受けたときは「意外と長いなア」と思ったものだが、瞬く間に残り時間はなくなってきた。

その間、豎山仁は自分の意思で変えられる所は、すべて変えてきた。髪を金色に染め、ピアスをした。金髪に飽きるとスキンヘッドにした。口ひげも生やした。しかし、これは、入院してから、医者に剃るように指示された。いつ、人工呼吸器をつけることになるかもしれない。そのときにひげは邪魔になるのだという。抜け落ちたひげが気管支にはいると、感染症を起こす可能性があるからだ。

自分の心臓を取りかえる日が、生きているうちに来るのぞみは、かなり低かった。移植コーディネーターからは、全国にいる六〇人以上の心臓の待機者の中で自分は緊急度の高いほうだと言われている。しかし、ドナーとの相性が悪ければ

それまでだ。

仁は、よく考える。心臓を取り替えたなら、自分は自分でなくなるのだろうか――と。

こう考えるのは自分の頭なんだから、心臓を取り替えても、自分は自分なのだろう。でも、自分の身体の中に他人がいるというのはどんな気持ちなんだろう。しかも、どんなに相性が良くても、自分はその他人を一生拒否しつづけるのだ。拒否しつづけていながら、その「異物」によって自分が生きていくことの不可解さを仁は解決しあぐねていた。

コーディネーターは「ドナー」に対して罪悪感をもつことはないんだ。移植を受けた後、仁君はドナーの臓器と一緒に生きていくんだよ。ドナーは仁君を生かすために生きているんから」と言ってくれた。

自分の場合、移植を受けるということは「心臓死」を意味する。それは、世間で死と扱われる自分が、「脳死」のドナーから心臓をもらって行き返るのだ。移植の先にある「生」は豎山仁のものなのか、それともドナーのものなのだろうか。

また、こうも考える、移植を受けて生き延びることができたら何をしよう——と。これは簡単だ。特別なことはなにもしないだろうと即答できる。普通に生きることを望むだろう。なにか仕事を見つけ、金を稼ぎ、旅行に出かけ、おいしいものを食べ、そして、恋人を作り——そういったことだけだ。

そのとき、主治医が入ってきた。

「秋山さん、ドナーが現れました。たったいま、摘出チームが先方の病院に向かいました。臓器の状況をみて最終的な判断ができるのは、二時間後になると思います。手術は、早ければ、四時間後です。準備にかかりたいと思いますが、いかがですか」

すぐには答えることができなかった。嬉しいのか嬉しくないのか、わからなかった。しかし、選択の余地はない。手術が一〇〇パーセントでないにせよ、こうして、ベッドで寝ていても、明日まで生きていることができる可能性と大差ないのだ。

「わかりました。お願いします」

医師は看護婦に術前の措置を指示し始めた。

◆保田義恵◆

保田義恵は肝硬変だった。町医者 of 注射針のつかいまわしで、感染させられたC型肝炎だった。自分の不摂生で肝炎になったのならあきらめたかもしれない。しかし、しらぬまに、体内に病気を埋めこまれた無念はぬぐいがたかった。

このまま放っておけば、確実に死がおとずれる。それを避けるには、移植を受けるしかなかった。

五〇年以上生きてきたのだから、いまさらと言う気持ちもあったが、それでも、死にたくはなかった。病気と戦う手段があるのだったら、それを選んだかった。義恵は移植待機者リストにいられてもらった。

最近、体調がすぐれない。根気も体力もなくなってきた。手術に耐えられるのか不安に思う。自分に都合のいい人の死を待つのは、正直って心苦しい。しかし、待つしかないのだ。臓器をもらったら、その人の菩提を一生かけて弔うつも

りだった。どこのだれと名前がわからなくても。

電話が鳴った。だるいからだをテーブルで支えながらゆっくりと立ちあがり、受話器を取り上げた。病院からだった。

「ドナーが見つかりました。すぐに病院にこられますか」

義恵は、電話に向かって手を合わせた。

◆安房礼二◆

安房礼二は、主治医から移植の可能性ができたことを告げられたとき、恐怖を感じた。命が助かるという安堵の反面、移植を受けることの意味に恐さを感じてた。手術への恐怖ではない、生への恐怖だ。

命をもらって、そのあと何年生きられるかわからない。自分はその時間を良く生きることができかどうか、自信が持てなかった。

ドナーは、自分の命と引き換えに臓器を提供する以上、レシピエントに命を無駄にせず、がんばって生きて欲しいと願っているはずだという考えに安房はとら

われていた。わたしの臓器を使って、あなたは生きてください。頑張って！ ドナーの臓器についてくるその無言の圧力に自分は耐えられるだろうか。

肺を患って、呼吸困難をたびたび繰り返す安房は、ここ数年、ほとんど病院で過ごしてきた。それは生きていくというのには、ほど遠い日々だった。今回入院する前、大切にしていたゴルフセットを友人に譲ってきた。元気なころは毎週のようにコースに出かけていた。友人は「パターンぐらいなら、病院でもできるんじゃないの」といつてくれたが、押しつけるように、全部引き取ってもらった。好きなことをあきらめることは、生をあきらめることに等しかった。

そんな自分が「生きる」ことを要求されて、大丈夫なのだろうかと他人事のように考えていた。

しかし、いまさら嫌とは言えない。

◆岩井智美◆

岩井智美は、透析のベッドに寝ながら、リストカットの後をなでていた。傷痕

をなでながら、腎臓移植を受けることができたなら、できるようになることを、数え上げていった。なによりも透析に通わなくてもよいのだから、好きな時間に好きなことができる。水も好きなだけ飲むことができる……。数えることの無意味さを智美は悟った。数えることなんかない。数え切れないほどたくさんの方ができるんだから。

透析は、小学校の五年生から始まった。運動もできず、林間学校や、修学旅行にも行くことができなかった。

放課後はすべて病院で過ごした。いきつけの病院の看護婦や、医師が友達だった。

腎臓移植を希望する患者は万の単位でいる。腎臓は、生体からだけでなく死体からでも移植が可能な臓器だ。ほかの臓器に比べれば可能性はるかに高い。しかし、待機患者の数を見てもわかるように競争率は高い。もし、ドナーの腎臓に適合するレシピエントが複数存在す時には、誰が移植を受けられるのかどうやって決めるんだろう。移植待機リストに登録したのも同じ日、症状も同じだとした

ら。年齢？ 学校の成績？ 何か世の中に役に立つ技術や才能を持っている人が優先されるのだろうか。

そのとき枕もとの携帯にメールが届いた。

「至急連絡乞う」

移植コーディネーターからだった。登録してからだいぶ時間が経っていたので、見慣れない名前に、思い出すまでに時間がかかった。

どうということなの？ 移植を受けられるのか？ 跳ね起きたい気分になったものの、まだ、透析はまだ一時間はかかる。じっと耐えた。

透析患者のため息をたっぷりと吸いこんだ天井を見つめながら、ほかのベッドに寝ている一〇人近い患者に、申し訳ない気分もほんの少し感じていた。

◆大貫信彌◆

「大貫さんですか。眼科医の柴田です」

月曜の朝、大貫信彌は行き付けの眼科医からの電話で起こされた。昨夜は深夜

までマッサージの仕事がはいったので、寝過ごしたらしい。

命に別状はないというものの、大貫の病気はなんとも気が滅入る病気だった。白内障。いずれ失明する。しかし、角膜を取りかえることができれば、治るのだという。

角膜は、提供が多い臓器でもあるので、悲観せず、捨て鉢にならずに生きてくださいと医師に言われている。毎日自分を励ましながら生きている。しかし、もし失明したらと思う。人生の途中で失明したほうが辛いという。だが、ものは考えようだ。失明する前に、色に満ちた風景を見、複雑に形の組み合わせた世界を目にすることができたのだから。

大貫は失明しても大丈夫なように、点字を学び、マッサージや鍼灸の資格も取った。いまは雇われの身だが、常連のお客もついている。

眼科医の電話は、近くの病院で、角膜の提供があるそうです。大貫さん行くことができますか？ というものだった。もちろん、二つ返事で承諾した。

私の目に入る角膜は誰のものだろう。その人はどんな景色を眺めてきたのだろ

う。きれいなものが好きな人だと良いのにと、大貫は願った。

◆竹岡忠夫◆

「おとうさん、いつてらっしゃい。待ってるからね」

竹岡忠夫は、その声をかけてきた妻にただうなずいた。手術室に運ばれる最中、苦しい息の中で、孝雄は考えていた。

手術室から生きて帰ってきたとき、空気の味はどんなだろう。許されるならば、病室ではなく、海辺や山の中で目を覚ましたいものだ。ボンベから送られてくる酸素という名前の物質ではなく、「空気」を思う存分に吸いたかった。

肺を提供してくれるドナーが見つかり、手術を告げられたのは昨夜だった。竹岡の容態は、移植手術に対して、逡巡を感じたり、感傷的になっていることを許さないものだった。医師の言葉は、竹岡の意志確認というより、最後通告だった。ただひとつ、気がかりというか、心残りは、自分がもらうことになる肺をこの目で見ることができないことだった。

「看護婦さん、お願いがあるんだけど」

竹岡は地下の手術室に向かうエレベータの中で、看護婦に声をかけた。

「わたしがもらう肺の写真を撮っておいてもらうように先生におねがいできないものだろうか。もし生きて、帰ることができたら、見てみたいんだ。そうではないと、この先、一生みられないでしょう」

「わかりました。先生にお願いしておきます」

看護婦の言葉を聞いて竹岡は安心した。感謝します、仏様。神様。

◆五井孝司◆

五井孝司はクローン病に罹っていた。腸の狭窄、穿孔、出血を繰り返す。原因も不明で、根治法がない難病だった。

一五歳と若いだけに、本人も周囲の人々も苦しんでいた。この先、長い人生を得て、学校に通い、社会にでるチャンスを手にするためには、移植を受けるしかなかった。

孝司はあきらめきれなかった。心臓や脳がやられたなら、あきらめもつくのに、なんで、腸なんだ。意識をしたこともない臓器の疾患をもったことを恨めしく思った。

移植待機者リストにエントリー後、何度か脳死者がだが、血液型の不一致や疫学的な問題から移植は見送られた。

しかし、とうとうその瞬間がやってきた。孝司は、昨日の夜、消燈の直前の病室に主治医が入ってきたときのことを一生忘れないだろう。

「孝司君、きみと相性の良いドナーが見つかった。急だけど、手術は明日でもいいかな。どうだい？」

孝司はポロポロと涙を流すことで、返事をした。

◆浜野悌一◆

「浜野さん、寝つけないでしょうけど、少しでも眠らなくちゃだめですよ。明日、手術なんですから」

浜野悌一は、父もおじも、みな、糖尿だった。そして彼らのほとんどが、合併症で死んだ。それを見てきただけに、自分は健康管理に人一倍気を遣ってきた。暴飲暴食をひかえ、糖尿につながるような、食生活は一切拒んだ。悌一の人生は文字通り味気ないものだった。結婚もした。しかし、妻は、悌一の「偏食」に根を上げた。別れた。

それなのに、糖尿を発病した。医者は「遺伝です」と一言ですべてを説明し、浜野の人生を否定した。

糖尿は罹っても管理をすれば、それなりにながらえることができると思っていたのに、医者は、「このままでは、一年か二年の命です。移植しか手はありません」という。自分ことじゃないと思って簡単に言いやがると思った。

悌一はまだ三九歳、一、二年のうちに死ぬのはいやだった。病気におびえてきたこれまでの人生に納得ができなかった。移植で直すことができるのなら、そうしなかった。ためらうことなく、移植希望者にエントリーした。

悌一の移植を難しくしていたのは、合併症が腎臓に現れていて、腎臓も同時に

移植しなければならなかった。

じっと、チャンスを待つしかなかった。しかし、その間にも、梯一の待機者リストのなかでの順位は上がっていった。それは、けっして喜べるものではなかった。

ようやく、梯一に最初で最後のチャンスが巡ってきた。

◆高梨久子◆

息子から摘出された臓器は、すべて順調に移植され、八人のかたの命を救ったと、婦長さんが教えてくださいました。わたしは名も知らぬ八人の方に「息子を救ってくれてありがとう」と念じました。

保田義恵さんが病院に久子を訪ねて来たのは、息子の死後、半年が経ったところです。婦長さんが義恵を病室に連れていらっしゃいました。

「久子さん。こちら、保田義恵さんとおっしゃる方です。息子さんの肝臓を移植された方ですって」

保田さんは服をたくし上げ腹部を露出すると、わたしの手を取り、手術の痕にあてた。もちろん、感覚の失われたわたしの指はなにも感じなかった。

「ここに、あなたの息子さんの一部がいらっしやいます。息子さんは、頑固なからだだったようですね。なかなか、私のものになったださらなくて、ひどい、拒絶反応がありました」

保田さんはそういうと、静かに笑った。

「実は、私、手術後に息子さんの名前と住所を聞かされました。それが、息子さんの臓器提供の条件だったそうです。本当はいけないことらしいんですが、コーディネーターのかたが教えてくださいました。ほかの方は知りませんが、わたしは、とても嬉しかった。それで、ご自宅に伺ったんです。でも、ご不在で。ご近所方がこちらに入院されているって教えてくださったんです。婦長にお聞きしましたが、息子さんが亡くなってから、ずっとこちらに入院されているって。ご自宅に帰りたくはないですか」

そんなことを息子はやっていたのか。わたしは恥ずかしさでいっぱいになりま

した。まったくどこまでも迷惑を考えていない子です。でも、ほかの方も、保田さんのように、ご自宅を訪ねてこられるかもしれない。そのときに、お詫びを言えないのでは――。知らず知らず涙があふれた。

「やっぱりお帰りになりたいですよね」

保田さんの問いかけにまぶたを閉じた。婦長が「帰りたい、とおっしゃってますね」と、保田さんに説明している。

◆保田義恵◆

「久子さんの息子さんの臓器をもらったからといって、負い目を感じる必要はまったくないんですよ」と、医師にいわれた。だが、高梨久子を自宅に帰してあげたいと思ったのは、負い目ではない。保田の本心だった。そうしなければ、後悔すると思った。義恵に肝臓をくれることになった高梨伏雄は、それを願っていたに違いないと感じていた。

義恵は移植手術が終わって目覚めた時「おかあさんに会いたい」と思ったのだ。

義恵の母はすでに亡くなっていた。会いたいと思ったのはその母ではないような気がしたのだ。きっと、ドナーの母なんだろうと義恵はごく自然に考えていた。婦長や病院のソーシャルワーカーと相談して、久子を自宅に戻すめどがたったときは嬉しかった。

一週間後、自宅を引き払い、久子の家にやってきた。以前から久子の面倒を見ていたヘルパーの晴子さんにも手伝ってもらい、部屋を掃除し、退院してきた久子を迎えた。

「おかえりなさい」と声をかけると、久子はゆっくりとまぶたを閉じた。

久子の世話のしかたは晴子さんに教えてもらったが、なれない自分では、久子さんも不安だろうから、晴子さんに以前のようにヘルパーとして久子の世話を頼む事にした。

そして、保田が久子と暮らし始めて、三日目、若い娘が久子の家を訪ねてきた。

腎臓の移植を受けて、退院する日、移植コーディネーターがやってきて、「実は」ときりだした。智美がもらった腎臓の持ち主が、移植が成功したら、自分の名と住所を知らせるようにと条件をつけていたのだという。ルールには外れることなので、智美の気持ちを聞いてからにするという。

智美は、迷った。しかし、すでに相手の腎臓を体内に受け入れた以上、拒む理由はないと思った。その人は、もうここにいるんだもの。

智美は、腎臓をくれた人の名前を聞いて、男なのか？　と思っただけだった。立ちションするようになったらどうしよう？　着る服とかがオヤジくさくなったらどうしよう、といって、コーディネーターを笑わせた。

住所を教えてもらったものの、わざわざそこへ行くつもりもなかった。でも、親戚の結婚式で東京に行くついでができたから、ふらりと訪ねてみることにした。「ずいぶんと古い家」と思った。眺めただけで帰ろうと思った。でも、腎臓のあたりに手を当て「ここがあなたの家なのね」、そうつぶやいた次の瞬間には玄関の呼び鈴を鳴らしていた。

玄関に出てきたのは保田だった

「あのー、突然ですが、わたし、岩井智美といいます。息子さんの腎臓を頂いてこうして元気になりました。ありがとうございます。親戚のけんこん式のついでがあったものですから、お礼に伺いました。では、これで失礼します」と、一息に話した。

このときは、まだ保田のことを知らないから、年齢から判断して、腎臓の持ち主の母親だと思ったのだ。

保田は、「まあ、あなたも」というと、智美を家に上げ、久子に会わせた。このとき、知美ははじめて、保田も自分と同じ境遇だと知らされた。

この日は、ホテルに帰った智美は両親に「しばらく、東京で暮らしたい」と伝えた。

両親は気分転換もいいだろうと、あっさり許した。一週間もしないうちに、智美は久子の家に「下宿」をはじめていた。

「保田さん、ほかの人もくるかなあ」

「どうかしらねえ」

保田の話では、久子の息子から、臓器提供を受けたのは、自分たちのほかに六人いるということだった。

「みんなきたら、久子さん喜ぶかな」

「そうね」

◆ 堅山 仁 ◆

ベッドで目が醒めたとき、仁は夢を見ていたのかと思った。しかし、目をあけた仁の様子をうかがっている看護婦の目が微笑み、うなづいたのをみて、移植手術が無事終わったのだと思った。点滴の管がついた右手を胸に当てた。鼓動をさぐった。生きている。まだ、自分は生かされるんだ、死の恐怖におびえなくても良いんだと思うと、からだがとろけるようだった。

回復は順調だった。拒絶反応がなかったわけではないが、あたらしい心臓との相性は悪くないようだった。手術から半年後には退院した。

退院後、自宅へ、コーディネーターが訪ねてきた。

「移植を受けた感想などをお聞きしたいと思ひまして」

コーディネーターは、移植を待っている間の気持ちとか、コーディネーターのサポート態勢への注文を質問してきた。仁は聞かれるまま正直に答えた。

「現在の、臓器移植では、ドナーの性別はおろか、名前もなにも知らされませんよね。それについて豎山さんは、どう思いますか」

「うーん、むずかしいあ。レシピエントはそれぞれですからね。でも、レシピエントが求めたら、教えてもらう権利はあるんじゃないでしょうか」

「知らされる内容が、本人にとって、うれしくないものでもですか」

「たとえば？」

「あくまでもたとえばですが、飲酒運転で死傷事故を起こした運転手の臓器であるとか」

「うーん、たしかに、そういう具体は知りたくない気もする。それでも、せめて名前ぐらいは知りたいですね。ぼくは想像力が貧困なもので、宙に向かって感謝

するよりも、偶像があったほうがやりやすい」

「そうですか。実は——」と、コーディネーターは切り出した。ここまでの話は、すべて、ふりだったようだ。

仁の心臓の元の持ち主の名前と年齢を聞いても、とくになにも感じなかった。

「高梨さんは、なにをつたえたかったんでしょうか」

「そこまではちよつと。ただ、名前と住所だけを知らせるようにということでしたから。勝手な想像ですが、遺族に感謝の言葉を書いた手紙をくださいという程度のことでしょう」

仁もコーディネーターの言う通りと思い、手紙を書いた。一週間後、返事が届いた。

「拝復 豎山様に置かれましてはお元気でご回復の由、おめでとうございます。

まず、最初にお断り申し上げなければなりません。豎山様に臓器を提供した高梨伏雄さんのおかあさまの久子さんは、現在ご病気で臥せておられます。お手紙を書くこともできませんので、わたくしが久子さんのご了解を得て、豎山様の

手紙を開封し、読んで差し上げ、こうしてお返事を差し上げる次第です。

わたくし、保田義恵と申します。豎山様と同様、伏雄さんの臓器をいただき、こうして元気で暮らせるようになりました。ご縁がありまして、現在、こちらのお宅でおかあさまのお世話のお手伝いをさせていただいております。わたくしのほかにも、伏雄様から臓器をいただいた岩井さん、安房さん、竹岡さんというかたも、こちらにはお見えになっています。不思議なご縁ですね。

おかあさまもあなたからの手紙をたいへんよろこんでおられました。これから
かしこ
も、お元気で過ごしてください。

高梨久子代 保田義恵

豎山仁様」

仁は、手紙を握り締めて新幹線に飛び乗った。

◆安房礼二◆

コーディネーターの話は迷惑だった。しかし、自分が臓器をもらういきさつを

聞いてしまった以上、ドナーの遺志を断れない。

安房は順調に回復していた。手術後は、社会復帰を目指したりハビリや、拒絶反応との戦いに明け暮れて、手術前に感じていた不安など思い出しもなかった。しかし、コーディネーターの訪問で、不安がぶり返した。おれは、人様の臓器を頂いてまでも生き延びたんだ。ばやばやしてられない。一生懸命生きなくちゃいけないんだ。しかし、どうやって、一生懸命生きればいいのか、皆目見当もつかなかった。

そうやって、おまえさんは俺に「生きろと迫るのか」と、高梨伏雄の肺が納まった自分の胸に語りかけた。

そしていま、高梨の家の前に立っている。線香をあげて、「許してくれ」と頼むつもりだった。

玄関の前で躊躇していると、もう一人男がやってきた。この家の人間かとおもって声をかけると違うという。お先にどうそと譲りあっているうちに、玄関が開いて、若い娘がひよっこり顔を出した。

「おじさんたちも、臓器もらったの？」
なんなんだ、いったい。

◆竹岡忠夫◆

綺麗な肺だった。感謝しなくちゃな。

竹岡は、約束通り、医者が写真に収めてくれた、自分の肺を見ていた。

「たいせつにするから」

竹岡は自分の胸をなでさすった。竹岡は移植を受けた日——命日になったかもしれないその日——を、新しい誕生日にすると家族に宣言した。

退院後、訪ねてきたコーディネーターから、自分が臓器をもらった経緯を聞かされると、ごく自然に、お礼にいかなくちゃな、と思った。妻もそうしたほうが良いとすすめてくれた。仏前に供える線香をもち、コーディネーターに教えられた住所を尋ねた。

家の前に男が立っていた。この家の人ではないという。呼び鈴を譲り合ってい

るうちに、家の中からでてきた、娘にもう一人の男ともども家に引きずり込まれた。

「で、おじさんたちは、どこをもらったの。あ、いけない自己紹介してなかったね。わたしは岩井智美、腎臓をもらったの」

竹岡は岩井の明るさとあっけらかんとした言いようににびくりしながらも、「わたしは、肺を頂いたんです」といった。すると、もう一人の男が、「私も」という。驚いて顔を見合わせ名乗りあっている私たちを見て、岩井は「どっちが左でどっちが右かしらないけど、そろいの臓器だから、一緒にきたのかな。不思議ね」といって笑い転げた。

その声にさそわれるようにして、もう一人女性が出てきた。今度こそ、遺族かと思い「このたびは……」といいかけると、岩井が「この人は、肝臓だよ」といった。

◆大貫信彌◆

コーディネーターが角膜をくれた人の遺志を伝えにきて「どうしますか」と聞いてきたとき、大貫は即座に「教えてください」と言った。

角膜の持ち主が自分と同じ歳の男性だとわかり、大貫はすこし安心していた。彼も僕と同じような雑誌やアニメ、映画を見てきたんだろう。僕と同じように、この国が変わる様を見てきたんだ。そう考えていると、もっと相手のことが知りたくなった。

勤務先の鍼灸院の休診日、住所を訪ねた。

玄関先に立つと、庭のほうから賑やかな声が聞こえてくる。覗き込むと、若い男女がこが植木に水をやりながら、互いに水を掛け合ってふざけている。縁側に座った中年の男女がそれをみて笑い転げているのだった。

あ、僕の目はこういう風景を見ていたんだ。明るくて温かい風景に、大貫は目頭が熱くなるのを感じた。こぼれでた涙をハンカチでぬぐっていると、娘が大貫に気づいた。

「あんたも臓器移植してもらった人？ あー、いわないで、いま当てるから。えーと残っているのは、脾臓、腎臓、小腸それから」

娘は、大貫の口をふさぐように手を前にかざして、もう片方の手を口に当てて考え込んでいる。

「ぼくは、角膜をいただきました」

あっけにとられながら、大貫が答えると、娘は「いま言おうと思ったのに」と悔しがった。

それから、肝臓、腎臓、肺、心臓に再会した。僕が目が見ていたおかあさんにもあった。

肝臓をもらった保田をのぞけば、ここで暮らす理由はなかったのだが、どういうわけか、みな、居候していた。

「べつに、臓器をもらった負い目というわけじゃないんだよ。とくに、いそぐ人生じゃないし、まあ、こうして、みんなと再会するのも楽しいかなって思ってるね」
竹岡と名乗った男がみんなを代表して答えた。

「きみもよかったら、遊びにおいでよ」

大貫は、勤め先を久子の家の近所の鍼灸院に変えた。勤めが終わると久子の家
にきて、久子の身体をマッサージするのが日課となった。

◆浜野悌一◆

「えーと、あんたは腎臓でしょう。ちがう？」

玄関に出てきた若い女に、いきなり言われ面食らった。

「ちがうの？ それともあたり？」

「あ、あたり。でも半分だけ」

呆然としていると、後から、男が四人、女性が一人顔を出した。若い女は「こっ
ちの二人が肺、わたしは腎臓、この人は心臓。彼女は肝臓」と、つぎつぎと紹介
した。

「智美ちゃん、びっくりしているじゃないの、早くあがっていただきなさい」
なにがなんだかわからないうちに茶の間に通された。年かさの女のほうが、茶

を淹れながらいきさつを説明してくれた。

「なにも、気に病むことないのよ」

岩井智美と名乗った女が口を挟んできた。

「臓器をくれたおっさんも、わたしたちのことを利用しようという下心があったんだからさ。ギブ・アンド・テイク、ヒフティー・ヒフティーなんだから」

「智ちゃん、おっさんはないだろうぼうくも同じ歳なんだぜ。がっくりくるよ」
角膜をもらったと言う大貫がチャカした。

「そっか、浜野さんは腎臓と脾臓か。それじゃあとは、小腸ね。早くこないかな」
浜野は、ここへくるまでの重苦しい気分をすっかり忘れていた。臓器移植を受けてこうやって生きていられるのはありがたかった。この命を大切にしようという気持ちは、前にもまして強くなった。しかし、コーディネーターからドナーの遺志を伝えられたとき、感謝しろと言われているようで、気分が悪かった。

とにかく、いちどでかけて、家族に挨拶しよう。会って、元気に生きていくことを伝えよう。そうすれば、自分も遺族も踏ん切りがつくだろうと思ってやって

きたのだった。

「ところでさ、私たちがみたいな関係ってなんていうの？　兄弟？　親子なの？」
岩井がみんなに聞いている。保田が静かに答えた。

「家族なんじゃない？」

「そっかあー。家族なんだ。それじゃ、悌一さん、お帰り」

先ほどのまでの気負った気持ちは、岩井智美のあっけらかーにすっぱりと飲み込まれて、跡形もなくなった。

◆高梨久子◆

保田さんは花火に行こうという、智美さんの提案を一蹴した。

「なんでよー。久子さんだって見たいと思うな、花火。ねえ、久子さん。ほら、まぶたをぱちくりしたよ。行きたいんだよ」

それでも保田さんは首を縦に振らなかった。あと一人くればみなそろって行けるのにと、久子は思った。しかし、それを言葉にできない自分が悲しかった。

「もう一人くればそうなの。そうすれば、一緒にどこにでもいけるじゃないの」
保田さんが、久子の心中を見透かしたようにいった。それを聞いた、智美は急に元気になった。

「そっか。花火まではまだ時間があるもんね。今日中にもう一人来ればいいんだ。絶対にくる。私にはわかるううう」

きつと、魔法使いの真似でもしているのだろう。声色を使いながら智美さんは部屋を出ていった。

伏雄にも、あんなに明るくて元気なお嫁さんがきてくれていれば、良かったのに。そうすれば、孫の顔を見られたかもしれない。

◆五井孝司◆

「どうしてもっと早く言ってくれなかったの。名前と住所くらいかまわないじゃないか。それがドナーの人の希望だったんでしよう。その人のおかげで僕は生きることができんだよ。なんで隠していたのさ。おかしいよ」

五井孝司は両親をなじった。孝司には、ドナーの遺志が特別なものとは思えなかった。これから一生、免疫抑制剤を服用するたびに、ぼくは、からだのなかにいる、この人を意識せずにはいられない。感じないですませるわけにいかないじゃないか。その人は僕の中で生きている——そんなロマンティックなことは考えない。でも、この人がいるから、僕は生きているんだ。それは、まぎれもない現実だ。手術前のぼくは、五井孝司だったけど、いまは、五井孝司プラスαなんだ。

両親にすれば、ドナーの存在を現実のものとすることで、孝司が「死」と引き換えの自分の生の重みに悩むのではないかと考えたのだった。コーディネーターはレシピエントの孝司が未成年だということを配慮して、ドナーの意向を孝司の両親にまず伝えた。両親は、息子を助けてくれたその人に感謝の気持ちを持ちつづけるために名前を聞いた。だが、息子の孝司には伝えないことにした。

移植手術は成功したが、孝司は、拒絶反応に悩まされていた。その苦悶のなかで、孝司は両親に言った。

「あのね、ぼくさ、もらった腸に呼びかけたいんだ。でもね、名前がわからないと気持ち伝わらないんだよ。誰がくれたのかわからない？」

両親が言いよんでいるのを目ざとく感じた孝司が「知っているの？ 知っているんだね。教えて！ そうすれば、ぼくは、この拒絶反応とたたかって、もらった腸と仲良くできるんだ！」

孝司に手をギュッと握られた母親が、その名を告げた。

孝司は、下腹部に手を当てると、「高梨伏雄さんの腸さん、僕のおなかに引越してくれてありがとう。仲良くしようね。僕は君をいじめたりしないから」

なんどもそうつぶやいた。

孝司の呼びかけが効を奏したのか、徐々に拒絶反応は収まった。三ヶ月で退院し、半年後のもうすぐで夏休みというときには学校に通い始めることもできた。学校が夏休みに入った土曜日、孝司は高橋伏雄の家に向かった。ドナーは、孝司の家から電車で一時間もあれば行けるところに住んでいた。もしかしたら、この東京で、すれ違ったかもしれないんだ、と思った。

高梨伏雄の家で孝司を迎えたのは、七人の男女だった。一番若い女の人「ほら、私の言った通りだ。最後の一人がきた。わーい花火だ花火だ」とはしゃいでいた。

◆高梨久子◆

最後の一人が来た。一五歳の男の子だという。保田さんに連れられて入ってくるなり「おそくなつてごめんなさい」といった。

みんなにお詫びを言うはずだったのに、自分がお詫びされてどうするの。でも、言葉が出ない。手を合わせることもできない。申しわけない。涙があふれた。

保田さんが、涙をふいてくれながら、そっとつぶやいた。

「おかあさん、なにもいわなくていいのよ。ようやく、みんなそろった。それで、いいじゃない」

その夜、みんなそろって花火見物にでかけた。ストレッチャーが必要な久子のために、運転免許を持っている安房が、レンタカーを借りてきてくれた。

花火は面白かった。音を感じながら、伏雄や夫と見に言った花火を脳裏に描いていた。周りでみている、「息子たち」も歓声を上げている。ようやく、死ねるのね、わたし。

久子は、翌朝静かに息を引き取った。八人の息子に見守られながら。

◆本山りえ◆

りえの乳首を不器用にくわえ初乳を飲む赤ん坊の顔を見ながら、りえは、幸せだなと感じていた。

子供が生まれても、高梨は面会にこなかった。不思議に思っていると、代理出産を幹旋クリニックスの担当者がやってきた。

「本山さん、ご出産おめでとうございます。これは、成功報酬の振り込み口座と通帳です」

開かれた通帳のページには、いち、じゅう……と数えなければ桁がすぐには理

解できない金額が打ちこまれていた。報酬を提示され、自分の行為は、ビジネスなのだとあらためて思い知らされて、ぞっとした。

「ちよっと困ったことが起こりましてね」

なんだろう。生まれた子供に障害でも見つかったと言うのだろうか。

「この子の父親が亡くなりました」

その言葉はりえの脳細胞を素通りした。

「これは、子供の父親の高梨さんが本山さんにあてた遺書です」

そういつて、男が封筒を差し出した。遺書——この言葉が、ようやくりえの脳細胞にひっかった。遺書ということは、自殺なのか。りえは、封筒を開け、読み始めた。

この子はある人のクローン？ この子はある人？

りえは自分がとんでもないものを生んでしまったのかと確認するように、傍らに寝る赤ん坊を見つめた。

「まったく、予想外のことが起きてしまいました。本山さん申し訳なく思ってお

ります。この子の養子先は当方で責任を持って見つけますので、今後のことは、ご安心ください」

そう言われた瞬間、それまで、麻痺していた脳細胞が弾けた。

「この子は私の子です。私が育てます。だれにも渡しません」

高梨の遺書に同封されていた出生届けを出すと、子供を連れて実家に帰った。子供抱いた娘を見て、両親はおろおろとするばかりだった。そして、「父」がいないとわかると、激怒した。

そのまま、家を出て暮らし始めた。

あれから二〇年が経った。あっという間だった。

◆本山伏雄◆

自分が、父のクローンだということを知ったのは、一八歳の誕生日だった。母が、突然、切り出した。

ショックだったのは、自分がクローンだということではなくて、目の前にいる

母が母でないということだった。

父がなぜ死んだのかということも知らされた。まったく自分勝手な奴だと思った。二〇年ちかくも経つというのに、いまだに母と自分を悩ませている。とんでもないやつだった。

そして、そのとんでもないやつクローンの自分は、目の前にいる母の死に耐えられるだろうか、と考えていた。

◆ 豎山仁 ◆

久子の葬式は「家族」みんなでだした。「家族」の家族も皆やってきて、自分の息子や娘、夫を助けてくれた人の母を見送った。

奇妙な「家族」は一カ月足らずで解散となった。葬儀の日の夜、お別れ会をやった。

「この家はどうなるんだろう」

智美は義恵に聞いた。庭では、五井孝司の家族が線香花火をやっている。

「仏壇に、伏雄さんがおかあさんにあてた遺書があつてね、それをみたら、弁護士の連絡先が書いてあつたの。だから、安房さんに電話してもらつたら、あとはお任せくださいって。私たちの役目は終わったってことなんじゃない」

「最初はばかばかしいと思つたけど、これで良かったんだね。楽しかったし、なんか、さっぱりした。けりつけたって感じ」

「そうね」

翌朝、ヘルパーの晴子さんに鍵を預けて、皆で家を出た。ターミナル駅で皆バラバラに別れた。

ホームに岩井と豎山が残った。

豎山は岩井に手を差しだした。

「さよならしなくちゃいけないのかな。智美さん、付き合ってくれないか、ぼくと」

「仁君、気持ちは嬉しいけど、近場ですますのやめようよ。わたしたち、せっかく世界が広がったんだからさ。それによく考えてごらんよ。わたしたち、みんな、

久子さんの息子なんだよ。お付き合いなんかしたら変だよ」

「それもそっか。まいったなあー。それにしても、伏雄さんも罪作りなことをしてくれたもんだぜ」

仁は、握り返されなかった手を握り締め、自分の胸をトンと叩いた。

(完)

参考文献(順不同)

- 厚生省厚生科学研究費特別研究事業「脳死判定手順に関する研究班」編著『法的脳死判定マニュアル』
日本医事新報社 一九九九年
- 石井美智子『人工生殖の法律学』有斐閣 一九九四年
- スコット・マックカートニー著 林克巳訳『移植』三田出版会 一九九五年
- 安田義守編著『涙の後には笑おうよ 心臓移植者とその家族たちの声』育文社 一九九九年
- エリザベス・ケイン著 落合恵子訳『パースマザー』共同通信社 一九九三年
- フィリス・チェスラー著 佐藤雅彦訳『代理母』平凡社 一九九三年
- ほか、WEBの移植関連サイトを参考にさせていただきました。

10 人の息子

2001年11月17日 初版発行

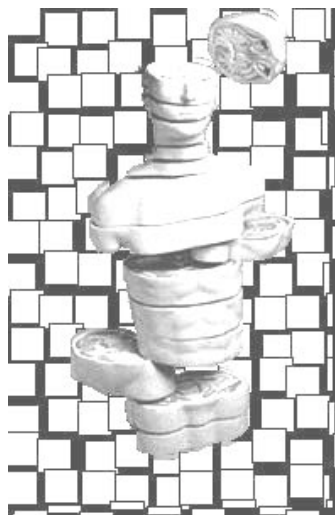
2001年12月5日 改訂新版発行

著者 ぶんろく

発行 Bunroku's Factory

©Bunroku 2001

10人の息子



ぶんろく